

佳作

私の人生

山口県サビエル高等学校三年 藤井 心彩

「絶対にできない。」

この言葉は私がよく小さい頃から使っている。小学生の頃、私はたくさんの習い事をしていた。バレエ、塾、よさこい、ピアノなど、週に一回しか休みがない状態だった。その時私は何をしてもネガティブな発言ばかりしていた。正直、やりたくない習い事ばかりだったからだ。しかし、母に言うとな怒られる、母の機嫌を損ねてしまうのではないかと母のことばかりを気にしていた。けれど、自分に限界が来てしまったため、母に打ち明けた。すると母は、

「なら二度と遊びに行くな。ママはあなたのこと想って言ってるの。」

と、案の定、怒られてしまった。私は全く母の言うことが理解できなかった。そして、最終的には母は自分のことが嫌いなんだと考えるようになってしまった。

それから嫌々習い事をしていった。すると、私の体に異変が起きてしまった。全身にぶつ

ぶつができたり、軽い抜毛症になってしまった。私は自分が毛を抜いていたことに気付いていなかった。数週間後に母が私の頭の一部の髪の毛が無くなっていたり、まっげやまゆげの毛も無くなっていたことに気付き、すぐに病院に行き、治療を受けた。そこで母は、私が過度なストレスによって抜毛症になったことを知った。

その夜、母と私は話した。母は泣きじゃくりながら母自身を責めていた。私もそんな様子の母を見て、母は私のことを嫌っていると勘違いしたことをとても後悔した。よくよく考えてみると、忙しい中、母は毎回バレーの試合やよさこいのステージ、送り迎えをしてくれていた。たとえ、私が試合に出れないと知っていても応援しに来てくれた。私が体調が悪い時はひと時も離れず、面倒を見てくれていた。

私はずっと母に気持ちを伝え、きちんと母に謝りたかったが、中々言い出せなかった。だから、二分の一人の日に親に気持ちを伝えた。すると母も父もとても泣いていた。

その時から私は心が動き、もっと一緒に居るうちに親孝行しようと思決意した。

そして中学生。母と父が離婚した。妹と話した結果、母に着いていくことになった。私は父と離れてしまった悲しみからしばらく立ち直ることができなかった。すると母が私を慰めるために、

「ママとパパの都合でごめんね。でも、会いたい時に会っていいからね。」

と言ってくれた。何も言わなくても理解してくれた母。私は気持ちを伝えて家のことは妹と協力してすることにした。すると、家に笑顔があふれるようになった。

そして高校生。高校生になると将来を考え始めた。私は将来、グローバルに働きたいため、留学したいことを親に伝えた。親はお金のことより私たちのことを心配してくれていた。

そして留学の日。普段全く泣かない母と父が別れる直前で見えたことのない程号泣した。私はとんでもなくらい愛されていることを実感した。

一年間の留学の中で何度も親と電話して、慰めてくれていた。親はずっと、

「あなたならできる。」

と、言葉をかけてくれて遂に一年間の留学生活が終わった。

日本に帰国後、親は、

「よくがんばった。あなたは自慢の娘だ。」

この言葉は心に一番残っている。これから、困難なことがあったら、親からの言葉を思い出してがんばってきたい。